要求しているかもしれない。――――――

たかった。結果的にみると、新人大会は一点差で二位、府民体育祭三位で近畿大会に出場した程度に止まった。決して満足のゆく成績ではなかったが一生懸命だったことは確しかである。今でもハンドボールを続けておれることは、高校時代での苦しかった練習のおかげであり、今から考えると先輩のシッタ・ゲキレイと共にありがたいことである。

全日本室内大会を見て

上田 孝

今、テレビで全日本室内ハンドボールを見てきた。テレビに写った最初は愛知紡績対日本体育大学の試合、9対6 愛知紡が勝つ。おめでたい。何故かというと大学現役より実業団が勝ったから。これは女子の部の優勝戦であった。次の男子の決勝は、大崎電機工業対東京芝浦工大、テレビで見たのは12対10で大崎がリード、後残り時間三分でテレビ中継は終ったが恐らく大崎の勝だろう。これは有難い。我高津クラブは芝浦大と数年前に試合をして36対0で敗れたのを憶えている。それ以来私は芝浦大を憎い奴と思ってきた。でも今日の試合を見ているとてもフェアで紳士的である。でも、私は実業団の大崎電機を応援した。自分自身につながるからである。芝浦大が敗れたのはハンドボールを普及させるための手段であるかもしれない。でもスポーツに関する限り、私としてはその様なことを考えたくない。大崎電機工業は実力で優勝したのである。実に立派である。私自身事業に成功してこの様な優秀な地位を持ちたいと常々思っている。我々高津クラブがかって足許にも及ばなかった芝浦が実業団に敗れたのだ。私も必ず成功して優秀なチームを養える様に奉仕する。諸君に頼む。実績において援助の面に於て応援してくれる様に。必ず、ハンドボール界において一派をなしとげてみることを約束する。今年の室内ハンドボール大会で、愛知紡績と大崎電機に優勝の栄冠が上った様に私の事業にもスポーツ面で大きな誇りを持ちたい。ケチな根性じゃなく堂々とやってもらいたい。私が必ず後押しする。

現実に会社には、入って働いている人が親のスネかじりの大学生に勝ったということこそ大いに意義がある。

（1961・12・25）

―終―